

動物のリハビリテーション

小林孝之[†] (アニマルクリニックこばやし院長・埼玉県獣医師会会員)

研修医時代の恩師より君は外科的センスがあるようだと言われたことから、私はすっかりその気になり骨折治療への関心を深めた。開業後、スイスに本部を置く非営利団体で、骨折治療の研究、開発の他、世界中で教育活動を行うAO財団 (AO Foundation/Arbeitsgemeinschaft für Osteosynthesefragen (骨折治療の基礎、臨床的研究グループを意味するドイツ語)) から出版された骨折治療に関する本を見つけ、何度もこれを読んで、骨折治療の理論と基礎を知り、理屈で行う外科があることを知った。お蔭で多くの骨折を手がける機会を得て、骨の早期治癒を導く治療への関心を深めていった。しかしその頃の骨折治療は手術だけであり、それが終われば治療は終わり、その後の動物の生き方に対しては全く関心を持っていなかった。つまり私の手術は全てやりっ放し状態であったわけである。

ある時骨折手術を行った犬の歩き方に異常があり、足の太さが左右で異なることを発見した。しかし、私は飼い主に骨折はとりあえず治っているので、今後は徐々に散歩をして行く内に何とか戻ってくるであろうと説明した。結局、いつまでも跛行は残り、足の太さも回復してこない動物に対し、為すべき手が無かった。獣医師は骨折の治療に対し、外科的整備に関心を持つばかりであり、飼い主からもその後の生活の質に対し特に要望を聞くことの少ない時代であった。

そんな中、アメリカの獣医外科学会の会場で、動物リハビリテーションなるセッションが開催されていた。私はその時間帯にたまたま他に関心の持てる内容が無かったことから、この動物リハビリテーションを聴講することにした。どのような内容かと待っていると、犬に対し真剣にリハビリを行う姿が示され、私は日本では犬にこのようなリハビリができるとは思えず、演者との間に大きなギャップを感じた。さらにその会場にいた多くの聴講者は非常に真剣であった。私は会場の雰囲気から、これは時代が変わる徴候かなと思いつつ、さらにリハビリの話に聞き入った。すると何と筋肉の状態の変化と関節の可動域などが説明され、自分の思いと重なる分野の解説が始まった。骨折でも関節疾患であっても、また打撲や神経疾患でもこの徴候が現れるという。そして拘縮を起こした筋肉であっても適切な治療をすれば回復して

元の状態にまで戻せる可能性がある事、コンディションが上れば生活の質が改善することなどが紹介され、まるで目から鱗の落ちる思いをした。何とアメリカには既に動物のリハビリに関する教育機関があり、講習受講と一定の試験を経て動物理学療法に係わる公認資格が出され、この資格を手にした獣医師、理学療法士、動物看護師などの専門家による動物理学療法が始まっていた。また世界的に動物理学療法士なる資格は存在しないことを知った。動物の理学療法はあくまでも獣医師が行う医療行為であり、その責任は獣医師にある。公認資格保持獣医師は動物の状態を診断し、その治療の可能性を提示し、公認資格保持理学療法士が中心となり、公認資格保持動物看護師とで実際に動物のリハビリテーション治療が行われている。さらにその獣医師は治療経過の確認とその結果から、さらに次の治療方針を示し、そのリハビリの結果を確認して次の指示を出し、理学療法のクオリティコントロールをする責任がある。また理学療法士は開業権が無く、あくまでも獣医師の指示の下で専門家として理学療法を行うのであり、獣医師は、例え公認資格を持つ理学療法士や動物看護師であっても、そのリハビリを丸投げすることは許されない。あくまで医療行為の一部であるためその責任は獣医師の医療行為であるとの認識が保たれていた。

私は動物のリハビリテーションの仕組みを知り実践したいと考え、この専門資格を取るべくアメリカ通いをしたが、ようやく全てのコース受講と試験、インターンシップを終了したところである。またこの春より自院での

小林孝之

— 略歴 —

- 1978年 日本大学卒
- 1984年 アニマルクリニックこばやし開院
- 2001年 東京医科歯科大学にて博士 (学術) 取得
- 2002年以降 東京医科歯科大学講師、金沢大学大学院特任教授 (常勤)、横浜市立大学医学部客員教授 (併任) を歴任



[†] 連絡責任者：小林孝之 (アニマルクリニックこばやし)

動物リハビリテーションに理学療法士が参加してくれることになり、動物看護師も参加する理学療法を行って、多くの動物の生活の質を向上することができた。その動物の快活な動きに飼い主の笑顔を見ることができ、リハビリテーションの重要性を再確認したところである。今

後、日本でも動物のリハビリテーションに対する認識が高まると共に専門家の育成が急務となることが予想される。飼い主の信頼に応えられる知識と技術に裏打ちされた、日本の動物リハビリテーションが構築され、運用されることを望むところである。